

					昭 年 月 日	船 舶 兵 団 司 令 部 教 育 船 舶 兵 団 司 令 部 (昭 和 六 一 六 七 部 隊)
19	18	18	17	17		
3	10	3	11	7		
	1			9	略 歴	略 歴
軍令陸甲第五三号により広島船舶司令部において編成完結。 広島に位置し船舶工兵連隊の教育訓練に任ず。 「ラバウル」に向け広島出発 「ラバウル」に於て第一七軍司令官の指揮下に入り船舶諸部隊を指揮し主として「ガダルカナル」島及び「ニューギニア」方面の船舶諸作戦に参加す。 比島「セブ」島に転進し「ガダルカナル」島撤退の船舶諸部隊の再建及び教育訓練に任ず。 大陸命第八四八号に依り船舶工兵第一野戦補充隊を「セブ」において隷下に入らしめられ爾後船舶諸部隊の編成教育補充に任ず。 宇品に帰還し爾後同地にありて船舶工兵第一野戦補充隊及び船舶工兵第一補充隊等補充各部隊を指揮す。						
					摘 要	

0543



昭				
20	20	19	19	19
9	9	11	10	10
25	2	1		31
大陸命第一一六七号により宇品において復歸しその人員は教育船舶兵団に編入せらる。 軍令陸甲第一四一号により編成下令。 広島に於て船舶兵団司令部の人員を以て教育船舶兵団司令部編成完結。 広島に於て終戦。 広島において復員。				
部隊長 初代 中将 桜田 武 二代 中将 物部 長 銚 三代 中尉 沢田 保 富				

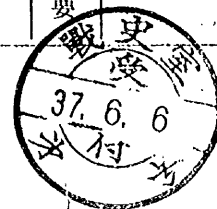
0544

昭					年 月 日	略 歴	摘 要
20	20	17	15	12			
9		8	6	9			
2		31	10	27			
陸軍運輸部釜山出張所は日華事変前より釜山に在り。 釜山出張所を基幹とし第 碇泊場司令部編成完結。 臨命第六九号により第一船舶輸送司令官の隷下に入り釜山において日華事変の船舶輸送業務に従事す。 第 碇泊場司令部は復員しその人員をもつて船舶輸送司令部釜山支部を編成せられ釜山において船舶輸送業務に従事す。 軍令陸甲第五二号に依り船舶輸送司令部釜山支部を改編し第一船舶輸送司令部釜山支部編成完結。 軍令陸甲第四五号により船舶輸送司令部を第一船舶輸送司令部南鮮支部と改称し馬山、鎮海、木浦等の船舶部隊を編入せしめらる。 南鮮に於て終戦。							

0545

昭和										年 月 日	第一船舶輸送司令部北鮮支部 (暁第六一六八部隊)	略	歴	摘要
20	20	20		20	20	20	20	20	17					
8	8	8		8	8	8	8	8	7					
23	22	15		14	13	12	10	9	31					
「ソ」連側に收容され、同日、「ソ」連軍監視下に明川出発。 明川に到着。武装解除さる。 鏡城に於て停戦。 戦後、鏡城南方二料の地点に於て対「ソ」戦に備え陣地を構築す。 鏡城に到着す。 清津出発 部隊、清津に到着す。 支部及び雄基出張所は合流し清津に南下す。 日ソ開戦、「ソ」連空軍羅津を爆撃す 支所。雄基、城津、遮湖、北港に出張所を設置し内鮮間の作戦輸送に任ず。 軍令陸甲第五二号に依り羅津に於て編成完結。支部は羅津に位置し清津、元山に														

0547



	20	20	20	20
	9	9	9	8
	20	2	1	24
部隊長 中將 瀬谷 啓	咸興到着。咸興中学校に收容さる。	終戦	羅南広場出発	羅南北方広場に到着。同所に露營す。

0548

第一船舶輸送司令部大連支部 (暁第六一六八部隊)						略歴		摘要
昭和						年月日		
20	17	15	12	9	8	6	7	
2	31	10	27	陸軍運輸部大連出張所は日華事変前より大連に在り。 大連出張所を基幹として第二三碇泊場司令部編成完結。 臨命第六九号により第一船舶輸送司令官の隷下に入り大連において日華事変の船舶輸送業務に従事す。 第二三碇泊場司令部は復員しその人員をもつて船舶輸送司令部大連支部を編成せられ大連に於て船舶輸送業務に従事す。 軍令陸甲第五二号により船舶輸送司令部大連支部を改編第一船舶輸送司令部大連支部編成完結。 大連に於て終戦。				
部隊長								

0549

大佐 岸野孝治

0550

昭和						年 月 日	第二船舶輸送司令部 略歴	摘要
20	20	20	20	19	18			
9	6	6	5	11	5			
2	20	1	15	20	21	31	軍令陸甲第五二号に依り中支那碇泊場監部を編成改正し上海に於て編成完結。 司令部は上海（後南京）に位置し北支支部、上海支部、南京支部、漢口支部、 南支支部等隷下各部隊を指揮し支那各地に於ける外洋並に水路の作戰輸送に任 ず。 軍令陸甲第二四号及び陸重密第一三〇号に依り編成改正完結前任務続行。 湖南支部編成完結。 第二船舶輸送隊は船舶司令官の隷下を脱し支那派遣軍總司令官の隷下に入る。 南支支部第二、三軍司令部の隷下に入る。 北支支部は北支軍の漢口支部及び湖南支部は第六方面軍の隷下に入る。 南京に於て終戦。 「参加せる主要作戰（戦闘）の概要」	

0551

	至自	至自	至自	至自
	20	19	1918	18
	11	12・4	1 10	6 4 3 2
	15	9 29	5 16	15 16 31 1
第七次復員	昭和二十二年三月二〇日	六三名		
第六次復員	昭和二十二年三月一四日	一八三名		
第五次復員	昭和二十二年三月七日	一一名		
第四次復員	昭和二十二年三月四日	四四三名		
第三次復員	昭和二十二年一月二七日	一七三名		
第二次復員	昭和二十二年一月一〇日	二九五名		
第一次復員	昭和二十一年十二月三十一日	七名		
「司令部の復員状況」 南京地区部隊は第六軍司令官、上海地区部隊は第一、三軍司令官の指揮下に入る。爾來各部隊は夫々各現地軍の指揮に依り上海に集結帰還復員す。 江北作戰。 江南北南作戰。 常德作戰。 湘桂作戰。				

0552

第八次復員	昭和二十一年	四月二一日	五四名
第九次復員	昭和二十一年	五月一三日	一九五名
第二〇次復員	昭和二十一年	六月一五日	六六名
女子軍屬	昭和二十〇年一二月三一日		六七名
部隊長			
初代	中將	沢田保留	
二代	中將	田辺助友	
三代	中將	伊藤忍	

0553

第二船舶輸送司令部北支支部 (晚第二九四一部隊)							
略 歴							
年	月	日	略 歴				
昭和	17	8	軍令陸甲第五二号に依り第一〇六碇泊場司令部を編成改正し塘沽に於て編成完結。支隊は塘沽に位置し出張所を青島、天津、秦皇島に配置し内地よりの軍隊				
20	20	20	20	20	18	軍令陸甲第三四号及び陸軍密第三〇号に依り編成改正完結。	
12	12	12	11	9	9	塘沽に於て終戦。	
9	11	9	18	9	2	塘沽に出発。天津に集結。	
単独軍属			女子軍属			「復員状況」	
六九名			一八名			福岡上陸復員	
佐世保上陸復員			一二名			福岡上陸復員	
七名			七名			佐世保上陸復員	

			21	21
			1	1
			28	10
		部 隊長	主 力	軍 人 の 一 部
二 代	初 代		三 一 名	二 一 名
中 佐	少 佐			
小 野 文 岳	吉 田 千 三 郎		佐 世 保 上 陸 復 員	佐 世 保 上 陸 復 員

0555

昭和				年 月 日	第二船舶輸送司令部上海支部 略歴 (昭和二十九四一部隊)	摘要
20	20	18	17			
9	3	5	8			
2		21	31			
昭和二十九年八月三十一日 軍令陸甲第五二号に依り第一〇一碇泊場司令部を編成改正し上海に於て編成完結。 支部は上海に位置し主として上海を基点とする、船舶輸送に於ける人馬、貨物等の揚陸搭載作業及び船舶に対する給水、給炭に任ず。 昭和十八年軍令陸甲第三四号竝に陸重密第一三〇号に依り編成改正完結。 上海地区に対する空襲激化し大型船舶の入港殆んどなく船舶輸送は小型汽船及び機帆船漁船を以てせざるべからざる状況となり当支部の業務は全く見るべきもの無きに至れり。 上海に於て終戦 逐次各出張所を閉鎖し連合国側の接收を受け且つ其の指示に依り呉淞集中營に集結す。						

						21
						1
						以降
部隊は現地除隊、召集解除者及び転属者等を除き、主力は左記の如く帰還を完了せり。						
左記						
区分						
人員						
月日						
上陸地						
第一次	将校以下	一〇七名	一月七日	鹿児島		
第二次	将校以下	一二四名	一月一〇日	佐世保		
第三次	将校以下	二三五名	二月八日	博多		
第四次	将校(学徒)	三名	三月四日	博多		
第五次	将校以下	一二九名	三月一五日	博多		
第六次	部隊長以下	二名	四月一日	佐世保		
合計						六〇〇名
部隊長						
初代	中佐	牧野文一				

0557

五代	四代	三代	二代
少佐	中佐	少佐	少佐
吉松	樋口	池田	久米
慶久	五郎	謙三	八郎

0558

					昭 17	年 月 日	第二船舶輸送司令部南京支部 (暁第二九四一部隊)	略 歴	摘 要
21	20	20	18	18	8				
1	9	5	5	5	31				
15	2	15	31	20					
第一〇二碇泊場司令部現地復帰。 軍令第五二号に依り復帰部隊を基幹として第二船舶輸送司令部南京支部編成完結輸送業務を開始す。 本部 南京 支部 安慶 出張所 蕪湖、江出 第二船舶輸送司令部南京支部復員完員完結。 軍令陸甲第三四号に依り第二船舶輸送司令部編成改正完結。 支那派遣総司令部に隷属。 南京に於て終戦。 上海港出発。									

0559

						21
						3
						18
						佐世保上陸同日復員。
五代	四代	三代	二代	初代	部隊長	
大佐	大佐	中佐	中佐	中佐		
高橋	柳屋	光井	山本	末松		
金一	良輔	一治	俊夫	三郎		

0560

至 自									昭	年 月 日	略 歴 要
20	20	20	20	19	18	17	17	17	17		
11	9	5	2	3	5	12	10	8	8		
15	2	1	28	28	21	19	18	31	31	日	略
支那主力、湖北省黃風峯團風鎮に集結す。 漢口に於て終戦 支那派遣軍の戦斗序列に入らしめらる。 と共に戦局の推移に応じ長沙、衡陽に碇泊場機関を開設し全員の補給輸送に任ず。 湘桂作戦に参加第六方面軍の指揮に入り岳州に前進し湘江啓開敵前上陸をなす 昭和一八年軍令陸甲第三四号並に陸重密第一三〇号に依り編成改正完結。 を以て同地附近の揚子江敵前渡河輸送並に局地輸送に任ず。 大別山作戦に参加、九江、石炭鑛碇泊場機関を強化し第一一軍に協力し舟艇隊 常德緞滅作戦に参加長江並に湘江に於ける軍隊輸送に任ず。 漢口に於て編成完結。 軍令陸甲第五二号及び陸重機密第二一二号に依り華中碇泊場監部を編成改正し											略
											歴
											要

0561

	21	21	21	21
	6	5	5	5
	2	27	13	9
部隊長	鹿兒島に上陸、復員。	上海出発。	上海に到着待機す。	右集結地を出発す。
大佐				
平				
尾				
末				
吉				

0562

			昭	年	第二船舶輸送司令部南支支部 略歴 (暁第二九四一部隊)
19	18	18	17	月	
6	3	2	8	日	
10			31	略歴	摘要
より二〇年二月迄湘桂作戦に参加す。 西營に出張所を開設す。 一部を以て雷州半島進駐作戦に参加す。 出張所―海口出張所―榆林連絡所。 出張所―汕頭出張所。 号所―江門揚搭班。 出張所―広東出張所（広州市大沙頭）―新填地揚搭班―黃埔揚搭班、虎門信 支部九龍 泊場司令部を主体とし一部第五、第五五各碇泊場司令部及、その他の部隊を充用、して九龍に於て編成を完結。					

	21	20		20	20		20	20
	4	9		8	8		7	2
	1	2		下旬	15		20	
西江北江、東江、各水路の掃海並に輸送に任ず。								
南支沿岸輸送のため汕尾澳頭港に各出張所を開設す。								
状況の変化に伴い、支部は一部「約一〇〇〇名」を九龍に残置、主力を以て広								
東に移駐、海口、西營各出張所を新に指揮下に入りたる六四砲に担任せしむ。								
広東に於て停戦。								
停戦後汕頭地区、広東地区の者は黄埔に、香港、汕尾澳頭地区の者は香港に夫								
々八月末集結を完了す。								
黄埔並に香港に於て終戦								
(八〇〇) 四月十七日(二五〇)の二回に黄埔を出発、同年五月六日、五月三								
日夫々浦賀港に上陸復員す。								
兵力								
復員時の兵力、広東一〇五〇、香港一〇〇〇なり、此の間二〇年十一月香港地								
区待機中、終戦となり所屬へ追及困難となりし、船舶砲兵部隊(一五五)を転								
入せしめられた石龍に在りたる支部の一部(一一〇)は第一二九師団關係に								

0564

		部 隊 長	転 属 せ し め ら る。
二 代	初 代		
大 佐	大 佐		
此 木 友 之	白 木 久 雄		

0565

昭和								年
月								月
日								日
21	20		20	20	20	19	19	19
5	9		9	5	1	11	11	10
14			2			30	20	20
第二船舶輸送司令部湖南支部 (暁第二九四一部隊) 略 歴 第二船舶輸送司令部臨時湖南支部を湖南省湘陰県湘陰に於て編成す。 軍令陸甲第一四二号に依り湖南省湘陰県湘陰に於て編成完結。 本部を長沙に前進出張所を湘陰易俗河に配し依然前任務を続行す。 撈刀市、長沙間の船、車、連絡輸送に任じ南部「エツ」漢打通作戦に参加。 反転部隊の衡陽長沙間の輸送及び漢口、岳州、長沙、駐留部隊の糧秣蒐集輸送に任ず。 岳州に於て終戦。 終戦後は一時自主的に糧秣輸送を担任し蒐集糧秣と共に大部の配属兵員を漢口、岳州に集結。 部隊は武装解除と共に中国指定地区に集結。 集結地区出発陸路行軍に抛り岳州に集結。								摘要

0566

			昭
		21	21
		7	6
		9	28
	復員。	浦賀港上陸。	上海出発。
部隊長			汽車輸送に依り涪州、漢口、鄭州、徐州、南京、上海に集結。
中佐 大久保利夫			

0567

						昭	年 月 日	第三船舶輸送司令部 略歴
20	20	20	19	19	17			
9	6	3	12	5	8			
2	1				31			略歴
昭南に於て終戦。						昭南 (シンガポール) に於て編成完結。爾後同地に在りて南方船舶作戦参加(本部は 昭南、第一中隊「カントン」岬 第二中隊 聖雀岬 第三中隊 昭南、親島。)		
防衛のため築城を担当す。						比島「マニラ」に転進し、 昭南 に指令所を開設す。爾後、同地に於て、南方(中部ニューギニア以西水域)船舶作戦に参加。		
昭南に於て終戦。						西貢に転進。		
昭南に於て終戦。						昭南に転進 西貢に連絡所を設置し 昭南 指令所を閉鎖す。		
昭南に於て終戦。						岡南作命に基き本部および一般中隊の一部を以て港砲兵第一大隊を編成し昭南		摘要
昭南に於て終戦。						防衛のため築城を担当す。		

0568

昭和						年 月 日	略 歴	摘要
20	18	18	16	16	16			
9	6	6	10	9	7			
2	10	10	10	28	15			
西貢に於て終戦 従事す。 「ハッチェン」「ブノンペン」「メコン」河流域に出張所を配置し輸送業務に従事す。 西貢に於て海上及び内河輸送諸作戦に参加す。 に配置す。 支部編成完結。本部を西貢に、出張所を「サンジャック」「ハイフォン」に配置す。 西貢に於て第四一碇泊場司令部復員完結。同日附第三船舶輸送司令部仏印に到着。船舶輸送業務に従事す。 仏領印度支那西貢に到着。船舶輸送業務に従事す。 字品出発。 にありて船舶輸送業務に従事す。 広島西部第二部隊に於て第四一碇泊場司令部編成完結。船舶輸送司令部の隸下にありて船舶輸送業務に従事す。								

0570

				昭
				21
				21
				21
				5
				6
				15
				13
				浦賀に上陸。
				主力内地帰還のため逐次「サンジャック」集結し復員船 永祿丸 に乗船。
				復員完結。
				部隊長
				初代 大佐 桑原支那吉
				二代 中佐 森山二郎
				三代 大佐 永峰真猛
				四代 大佐 大寺三郎

0571

第三船舶輸送司令部「ボルネオ」支部			略	歴
(暁第二九四四部隊)				
昭	20	20	18	年
	4	3	6	月
		1	10	日
軍令陸甲第三四号に依り第四八碇泊場司令部の人員をもつて「ボルネオ」島「クチン」に於て編成完結。 主力は「クチン」一部「ミリー」に位置し船舶輸送業務に従事す。 南方軍に隷属す。 軍令陸甲第四三号に依り現地復帰し第七〇碇泊場司令部に編入せらる。 部隊長 少佐 宮崎 普一郎				
				摘要

0572

昭和										年
20	18	18	18	17	16	16	16	16	16	月
9	6	5	4	2	12	10	7	7	7	日
2	10	20	20	16	8	4	17	15	15	日
昭南に於いて終戦。 ラワン」「バタン」に設置し船舶輸送業務に従事す。 第四六碇泊場司令部解隊同日第三船舶輸送司令部馬米支部編成完結。引続き主力を昭南に、出張所を「ブライ」「ポートセツテンハム」「スマトラ」メラワン」に設置し船舶輸送業務に従事す。 編成着手 軍令陸中第三四号に依り編成改正下令。 昭南に進駐し同地に碇泊場を開設し船舶輸送業務に従事す。 泰国「シンゴラ」港に上陸。爾後同地に於ける船舶輸送業務に従事す。 海南島海口に於いて上陸作戦準備 朝鮮馬山に到着爾後馬山港に於ける船舶輸送業務に従事す。 善通寺騎兵第五聯隊補充隊に於て第四六碇泊場司令部編成完結。										略
										歴
										摘要

第三船舶輸送司令部馬米支部 略 歴

(既第二九四四部隊)

0573

				昭 20
				11
主力は「レンバン」島に集結、各支部も各地区集結す。 爾後数梯団に分れ復員す。主力の帰還は二一年六月				
部隊長				
初代 大佐 天辰千吉				
二代 中佐 守下敏夫				
三代 大佐 吉田栄治				

0574

昭和				年 月 日	略 歴	摘 要
20	19	18	17			
5	5	6	7			
	5	10	7			
軍令陸甲第三四号に依り第五碇泊場司令部を基幹として「バレンバン」に於て第三船舶輸送司令部「バレンバン」支部編成完結。 編成改正に依り第三船舶輸送司令部南「スマトラ」支部を編成し引続き南方水域に於ける船舶作戦並びに南「スマトラ」地区に於ける船舶輸送及び各港湾の強化水路の設定に従事。 編成改正に依り第三船舶輸送司令部「スマトラ」支部を編成し南部「スマトラ」「バレンバン」「バンカ島」「ムントク」「ジャンビー」「バンジャン」諸港の強化を計ると共に作戦の深刻化に伴い特に石油輸送の完べきを期す。 軍隊区分に依り第二五軍の直轄となり「スマトラ」交通隊長の指揮下に入り、南部「スマトラ」交通隊を編成し輸送業務の強化、諸港湾並びに主水路の防衛に任ず。						

0575

	21	21	21	21	21	21	20
	12	12	10	7	2	2	9
		5	9	21	23		2
「パレンバン」に於て終戦。終戦と共に他部隊勤務者は最寄部隊に転属せしめ 他部隊よりの勤務者は支部に転入せしめらる。 一七五名「ガラン」島に移駐す。 炭鉱労務者二名、患者二六名帰還す。 三八名「パレンバン」出発。帰還。 一五名「パレンバン」出発。帰還。 四五名帰還復員。 三〇名帰還。 部隊長 中佐 大野 陸 郎							

0576

至 自 至 自							昭	年 月 日	第三船舶輸送司令部爪哇支部 (暁第二九四部隊)	略	歴	摘要
22 22 21 21 20 20							18					
5 1 9 5 9 3							6					
31 31 5 8 2 1							10					
軍令陸甲第三四号に依り第四〇碇泊場司令部現地復帰しその人員を基幹として 「スラバヤ」に於て第三船舶輸送司令部爪哇支部編成完結。 爪哇並びに「小スンダ」方面の船舶輸送業務に従事。 南方軍に隷属。 「スラバヤ」に於て終戦。 内地復員(主力) 内地復員(作業隊) 部隊長 初代 中佐 松野 菊 仙 二代 中佐 三 吉 一												

0577

三代	少佐	青島静夫
四代	大佐	増田義夫

0578

昭和							年 月 日	略 歴	摘 要
20	20	20	19	18	18	18			
4	3	2	9	7	6	6			
15	1					10			
軍令陸甲第三四号により緬甸「蘭貢」に於て編成完結。 「昭南」に向け出発。 「昭南」着爾後南方運航会社の配船を以て「ボルネオ」方面への輸送に従事。 英機の攻撃を受け一二隻より成る輸送船団は「ビルマ」「カレグク」島にて全船沈没す。 本船員は後「昭南」に復帰。 一部第三船舶輸送司令部「ジャワ」支部「スラバヤ」出張所（浅野隊）配属小「スシダ」列島の輸送に従事。 南方軍に隷属。 軍令陸甲第四三号に依り現地復帰左記部隊に転属す。 第七〇碇泊場司令部 一〇五名									

第三船舶輸送司令部ビルマ支部
(暁第二九四四部隊)
略歴

0579

第一船舶輸送司令部	一名
第三船舶輸送司令部	一名
第一二揚陸隊	一名
第三船舶輸送司令部 シヤワ支部	一名
部隊長	
大佐 根本 誠	

0580

昭和					年 月 日	略 歴	摘 要
19	19	18	17	16			
7	2	6	12	12			
10							
第五二碇泊場司令部として比島「リンガエン」湾に上陸し輸送業務に従事す。 爾後主力は「マニラ」に移駐す。 「マニラ」に於て第五二碇泊場司令部を開設し輸送業務に従事す。 軍令陸甲第三四号により第五二碇泊場司令部は現地復帰し復帰部隊を基幹とし て第三船舶輸送司令部「マニラ」支部と編成し引続き現地に在りて輸送業務に 従事す。 支部長平尾末吉大佐転出、新支部長松山初之大佐着任。 支部長松山初之大佐転出、新支部長守下敏夫中佐着任。依然「マニラ」に在り て船舶輸送業務に従事し、<u>ルソン</u>各地（「アパリ」「レガスピー」「バタンガス」 「カブカーベン」「クマオ」「バラソン」）に出張所並に派遣隊を設置す。							

第三船舶輸送司令部マニラ支部
(暁第二九四四部隊)
略歴

0581

20	20	20	20	19	19
2	1	1	1	12	11
8	24	12	6	28	28
「マニラ」空襲に依り業務遂行不可能のため河合少佐長とする一部人員を北部 「ルソン」「ラボック」に派遣し碇泊場司令部を開設す。 主力は北「サンフェルナンド」港に移駐し一部資材及び人員を「マニラ」に残 置し後藤少佐を長として碇泊場司令部を開設す。(二〇、七同地に於て玉砕す) 又各出張所及び派遣隊の引揚げを開始す。 北「サンフェルナンド」に集結中米軍「リンガエン湾」に侵入せる為後方既設陣 地に転進を開始せしも敵の集中砲撃をうけ、集団行動不能となり各個に分散 して山中に転進退避し山岳地帯を移動中多数の生死不明者を生ず。 部隊は一時虎兵団長の指揮下に入り歩兵第七六連隊守下支隊となり「バラライ 「レプトン」附近に進出す。 三船司作命に依り虎兵団長の指揮下を脱し「アバリ」に碇泊場を開設するため 三梯団となり同地を出発す。 「アリタオ」に到着。行軍停止の命を受け同行の特別水上勤務中隊及び台湾勤 務隊と共に尙武兵站監の指揮下に入らしめらる。					

0582

20	20	20	20	20
8	5	3	3	2
2	7	17	5	12
四ヶ中隊を編成し同地を出発す。 作命により各隊行軍停止。 停止位置 本部及び指揮班 「ラロ」 警備中隊 「ソマウニ」 第一中隊 「リパーグ」 第二中隊 「イクイグ」 第三中隊 「ゴシ」 「イクイグ」に集結。 「カワヤン」に移動の命に依り「イクイグ」出発。 爾後「カワヤン」「カベツアン」「タンサ」「サリオク」を経て「アリンクン」に向う。途中落伍者、戦死者多数発生す。 残存者は「アリンクン」に到着す。 「アリンクン」「ナトニン」「バスト」の各地に於て米比軍と交戦し全滅状態				

	20	20
	9	9
	2	2
比島「ルソン」島北部に於て終戦。 終戦に伴い戦斗行動停止、爾後生存者（部隊）は所在の地点で武装解除された 後米軍収容所に入る 歴代部隊長 三代大佐 平尾末吉 二代大佐 松山初之 三代中佐 守下敏夫		

0584

昭和					年 月 日	第三船舶輸送司令部セブ支部 (暁第二九四四部隊)	略 歴	摘要
19	19	19	18	18				
8	6	3	7	6				
頃	頃	頃	頃	10				
第三五軍（尙集團）比島中南部に進出す。 第六一碇泊場司令部「ミンダナオ」島に到着 支部長として光井一治大佐赴任。 司令部編成要員に充当せられ内地帰還、井上大尉支部長代理となる。 小室中佐以下の主力（将校一二、三名、下士官三〇名兵若干）は第六一碇泊場 支部長小室徳助中佐交代 ブリカ」に出張所を設け附近の海上輸送に従事。 「ダバオ」「カガヤン」「イロイロ」「タクロバン」「サンボアンガ」「フア 進に伴い第三船舶輸送司令部セブ支部に改編せらる。支部は「セブ」市に在り 改編して第四船舶輸送司令部セブ支部を編成、次いで第四船舶輸送司令部の転 軍令陸甲第三四号に依り第四碇泊場司令部現地復帰す、この現地復帰部隊を								

0585

20	20	19	19
3	1	10	9
上旬	30	頃	12
支部長は（尙）船舶隊長となり左記諸部隊を併せ指揮す。 船舶工兵第一野戦補充隊 第一五揚陸隊 第六一碇泊場司令部 海上輸送第八大隊 船舶工兵第一九連隊 第五野戦船舶廠「セブ」支廠 「セブ」市附近第一次空襲。 米軍「レーテ」上陸に伴い「セブ」「オルモック」間の輸送に従事、又「オルモック」港に於ける揚搭作業実施の為光井大佐以下同地に進出す。 井上大尉以下一〇〇名地号作戦の為「ネグロス」島に転進す。 より「レーテ」島を除く中南部全島の船舶部隊は各島最高指揮官の指揮下に入り地上戦に参加。 主力「レーテ」光井大佐指揮			

0586

20			
9			
2			
比島に於て終戦 終戦に伴い戦斗行動を停止し爾後生存者は所在の地点に於て武装解除された後 米軍収容所に入る。			
部隊長	初代	中佐	小室徳助
二代	大佐	光井一治	
一部「セブ」市 抜兵団万城目旅団長指揮 一部「セブ」北部 玉兵団と同行動 一部「ネグロス」 河野兵団長指揮 一部「パナイ」 戸塚大隊長指揮			

					第三船舶輸送司令部パラオ支部		略歴	
					(晩第二九四四部隊)			
					昭		年	
					18		月	
					6		日	
					10		略	
					22		歴	
					2		摘要	
					9			
					21			
					20			
					20			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			
					2			

0588

					昭 18	年 月 日	第三船舶輸送司令部泰支部 略歴 (暁第二九四部隊)
					10		
					10		
		21	21	21	20		
		6	6	6	9		
		22	18	8	2		
軍令陸甲第八九号に依り第五碇泊場司令部現地復帰し復帰部隊を基幹として 第三船舶輸送司令部泰支部編成完結。 爾後「磐谷」に在りて船舶輸送業務に従事。 「磐谷」に於て終戦。 「磐谷」出発。 浦賀上陸。 復員。						略	歴
部隊長 中佐 南石 明						摘要	

0589

第三船舶輸送司令部第一支部 (暁第二九四四部隊)			年 月 日
昭 19	20	20	略
5	5	7	歴
20	21	20	略
昭一八軍令陸甲第一一二号により第五船舶輸送司令部「マルメラ」支部を第五船舶輸送司令部の、小樽転進に伴い「マルメラ」に於て第三船舶輸送司令部、第一支部に改編す。 本部は「マルメラ」に位置し出張所を「クーパーン」「デリー」「ラウテン」に出し東部小「スンダ」列島向け中継輸送を担任す。 又「アル」「ケイ」諸島方面に対しても中継輸送を実施す。 支部は「バンコック」に向け転進を開始す。 支部の主力は「バンコック」に到着せしも各一部は「ジャカルタ」及び「シンガポール」に残留せり。其の後「シンガポール」残留者は「バンコック」に復帰す。 空襲激しく揚搭作業等不能となり港湾の諸整理に任ず。			摘要

0590

	21	20
	6	9
	22	2
部隊長 中佐 倉塚 亮 「バンコック」に於て終戦。「コナンナヨーク」に収容せらる。 復員。		

0591